Jaspers Society of Japan

宗教的寛容の原理としての暗号形而上学

（第21回世界哲学会議シンポジウム発表の要約）

佐　藤　真理人

ソ連の崩壊は冷戦の終結によって世界の平和の到来を期待させるものであったが、世界情勢はむしろ、局地的ではあれ身近であるだけに一層脅威的な新たな戦争に対する不安と恐怖をもたらしている。現代の状況では宗教的対立、宗教戦争が最も重要な問題であると思われる。ヤスパースの精神に即しつつ宗教的寛容の可能性の条件を探求したい。

ヤスパースの精神に即して言えば、哲学は宗教をも越えゆく自立的な思惟の道である。哲学的な立場でこそ独断なき交わりの関係が諸宗教の間で可能となるがゆえに、「哲学から宗教へ」ではなく「宗教から哲学へ」こそが妥当するであろう。考察の中心点は聖書宗教ないしは啓示信仰に置かれる。というのは、暴力によって信仰の対立に決着をつけようとする態度は主に一神教的な啓示宗教の間で現われているからである。

一神教のうちに多神教の要素が潜み、また多神教の背景に一なる神性が予想されており、両者は全く無縁ではないというのがヤスパースの洞察である。「近き神」の表象が多神教の様式である。ヤスパースにおいて近き神は「暗号」としてとらえられて、その実在性が否定される。私は、自然を神と見るスピノザに典型的に現われている「汎神論」の立場が、一なる遠き神と多なる近き神との対立を調停し、また洋の東西の諸宗教が批判的交わりの関係に入る場としての機能を果たしうると考える。その観点に立つとき、一神教と多神教の関係は全自然とそれを背景とするもろもろの自然現象との神格化の関係として理解できる。ヤスパースが汎神論をどう評価しているかは明確ではないが（その発言は少なく、積極的に評価する言葉は見出されない）、そのような思想を許容する余地はあると思う。ヤスパース哲学的に換言すれば、具体的に表象されるあらゆる（近き）神は暗号なのであって、絶対性を主張することはできない。

NII-Electronic Library Service

Jaspers Society of Japan

そして一なる（遠き）神はつねに背景としてのみ思惟されうる。啓示信仰の神も事実上は他と並ぶ一つの近き神、すなわち暗号であり、それを認めさせることがヤスパースの宗教哲学的思索の焦点なのである。

その考え方を前提にすれば、何者も排他的に神の意志を代弁する資格をもたない。直接に神を見た、神の声を聞いたと主張する者の帰結は独断と狂信と排他性である。神の名において、神の意志と称して、敵とみなされた人々を殺すことは、非理性的人間の意志と衝動によることである。人間同士が殺し合うことを神が望むとなぜ信じることができるのか。神の意志は「汝、殺すなかれ」であるはずである。この言葉は特定の宗教的立場を超えて、普遍的な倫理的要求として妥当しうると思われる。

ヤスパースは『啓示に面しての哲学的信仰』において「神人キリストの信仰」、「啓示の実在性」、「独断的信仰真理の排他性」を放棄することを聖書宗教に求めているが、この要求は広く宗教一般に拡張して理解することができる。なぜならおよそ宗教はどこかで絶対的な真理と正当性をドグマとして主張するからである。それによる対立と暴力を回避する寛容の可能性は、暗号形而上学の原理のうちに求められる。上述の汎神論的世界観の提言はいわばその一つの具体化である。

今日、経済、政治との複雑な絡み合いの中で、宗教的対立は途方もない暴力の連鎖を引き起こしている。現実には人類愛や人間愛は存在しない。あるのは閉鎖的な同胞愛と民族愛だけである。その排他性の中に人間本来の自由を尊重する態度は存在しない。宗教的信仰が根本のところで自由の放棄を強要するのに対し、暗号形而上学は自由の空間を確保する。自由と寛容は不可分である。「ただ自由においてのみ人々は一致することができる」（『哲学入門』）。そして「神は個々人の自由な決意を通してはたらく」（『啓示に面しての哲学的信仰』）。これらのヤスパースの言葉はどんな宗教的ドグマよりも説得力をもっている。

2003年８月11日、第21回世界哲学会議シンポジウム――（トルコ、イスタンブール、テーマ：The Tension between Political Power and Faith in View of Jaspers's Ideas / Das Spannungsfeld "Politische Macht und Glaube" mit Blick auf Jaspers' Ideen ――原題：Chiffren-Metaphysik als Prinzip der religösen Toleranz）

NII-Electronic Library Service